

これからの都立図書館について

-世界の中枢を担う都市・東京から情報発信とネットワーク基地としての都立図書館
を目指せ！-

2005年9月26日

よりよい練馬区の図書館を作る会会員

鈴木 健夫

練馬区貫井 3-29-18(03-3999-8523)

これからの都立図書館を創造するとき、第一に思い浮かぶことは、日本が経済大国ではあっても、文化、情報の担い手としての責任は果たしているのかということである。

一方、先進国の大都市における図書館、博物館、美術館、劇場などを較べてみれば、いかにも見劣りのする東京であることに愕然とする。

第二には、都市全体の姿・形の惨めさである。

中でも図書館の劣悪さは強大である。蔵書・保有資料の数、建物の規模、司書の専門性とその員数、図書館が発しているミッション(使命や目的)のあいまいさ、これらの現状を一瞥すれば、いかに図書館の役割を簡単に考えてきたかが伺える。

これからの公立図書館の役割は、21世紀を生きていく、とくに若者の自由で旺盛な知的エネルギーを収斂させるサポート役として、それは新たな文化・教養・ベンチャーなどを創出させていく母胎でなければならぬ。

単なる情報の発信だけを担うのなら、最先端のIT技術を駆使したIT図書館を目指せばいいということになるだろう。しかし、いかにIT化が進展していこうとも、図書の閲覧・展示の効果は何物にも代え難い大きな機能である。だからこそ、現物の図書・資料の展示されている「図書館」が必要なのである。

これからの都立図書館の在り方を考えると、最初に思い至るのは、専門制をミッションとして掲げることである。ビジネス専門館、演劇・映画・音楽・美術などの

芸術に関する専門館、文学全般に関する専門館、子供に関する専門館、環境・自然科学に関する専門館、人文・社会科学に関する専門館という具合に専門分野の図書・資料を十分に保持し、専門の司書がゆとりをもって対応してくれる新たな図書館像である。と同時にそれらがゆとりをもったスペースをもち、個人閲覧のブースも相当数あり、豊かな文化的な香りをかもし出す雰囲気を持ち、施設像の姿を描きたい。

また、インターネットが利用できるパソコンが十分な台数揃っており、世界の図書館と、国内の主な図書館と連動して利用できる利便性が求められる。さらには、都内区市町村の図書館を支援するバックアップ体制が整っていることである。

司書についても、新たな視角が要求される。それは外国語に堪能な司書であってほしい。英語、中国語、韓国語、アラビア語、ロシア語などが会話を含めて堪能であること。文字の理解ではギリシャ語、ラテン語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語などが要求されよう。それほどまでにグローバル化は進展していくだろうと推測される。

都立図書館をこの様に想定した上で、我々は練馬区の図書館像を新たに描いている。地域の図書館は地域住民の要求を掲げて、地域図書館を作り出す。それは都立図書館が上記のような専門的な機能を持つことが前提なのである。

-世界の中樞を担う都市・東京から情報発信とネットワーク基地としての都立図書館を目指せ！-

これからの東京は上記のスローガンのように世界を見つめて活動して欲しい。区民もそうした視角をもって図書館を利用していきたいと思っている。

以上